

島根の中山間地から Work as Life

第4回

「ゆっくりでいいよ」

野中 浩一

結局は学歴？

誰が言ったかは忘れた。

3～4年前、私が働くフリースクールで聞いた生徒の言葉。

「私たちにはゆっくりでいいよって言うけど、スタッフさんは附属とか高専の話してるよね。結局は学歴なんだなって。」

フリースクールには30～40代の職員が数名おり、わが子の受験や進路についての話がときおり出てくる。

その受験の話を目撃した生徒（高校生）が、別の生徒に話した言葉だ。

私はそれを偶然耳に挟んだ。

わが家の受験

小6と中3の娘、ともに私の勧めで今年受験をした。

あの附属と高専だ。

島根県は受験の選択肢が少なく倍率が低い。

国公立で唯一受験がある附属小と附属中で1.5倍～2倍あるかないか（倍率非公表のため推定）。

高校に至ってはトップランクの進学校でも0.9～1.2倍。

私が暮らす雲南市の公立高校は0.7～0.8倍ほどである。

しかし当の地元受験生たちは気楽かといえば、そうでもない。
初めてのことから心配は尽きない。

あの言葉を聞いてから、自分の中でときおり考える。
生徒だから「ゆっくりでいいよ」で、わが子だから「しっかり頑張って学歴つくれ」なのか？

少なくとも私はそういう感覚ではない気がしている。

皇女と呼んでください

「野中さん、あなたは平民ですよ。これから私を皇女と呼んでください。」
ある女子生徒に言われた。

一瞬面食らったが、その子の味わいある言いようも手伝い、すぐに面白みが勝った。

以前から、その子は「ゲイツの娘に生まれたかった」と私に話してくれていた。

素敵なお家族に恵まれ、
その子の激情の嵐に誰もが翻弄されることはあるものの、
家族仲も良く、経済的にも不自由なく、勉強もまずまずできる。

しかし常にカーストが意識され、今の自分では満足できないのかもしれない。

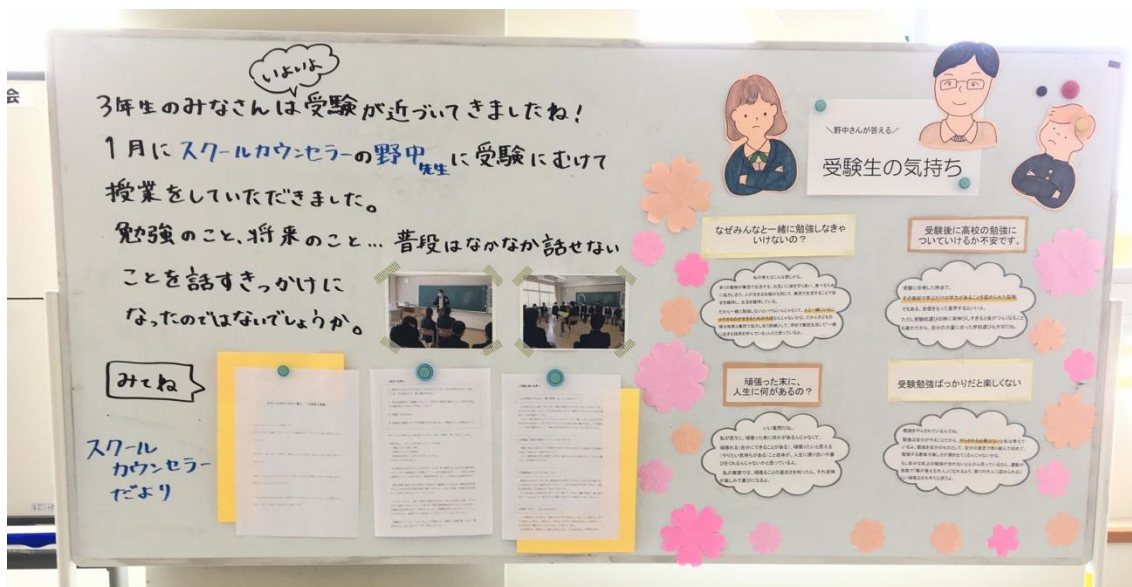
そしてその意識が「野中さん、あなたは平民ですよ」という言葉になり、
「私は平民だから全然いいけど、皇女とは呼びにくいわ。皇女の〇〇さんでいい？」という返事になり、
「う～ん、そっか～」というやりとりになる。

中学生と受験

1月、私がスクールカウンセラーとして赴任している公立中学で、
「受験」をテーマに授業を担当させてもらった。

小グループでのやり取りと、
全体での振り返りと。

その時の様子を、養護の先生に素敵にまとめていただいた。



中3生からの質問の中に、

『なぜみんなと一緒に勉強しなきゃいけないの?』

という声があった。

私はそれにこう答えた。

『私の考えはこんな感じかな。多くの動物が集団で生活する。お互いに命を守りあい、食べるために協力し合う。人が生きる仕組みも同じで、集団で生活することで安全を維持し、生活を維持している。

だから一緒に勉強しないといけないんじゃないかと、人と一緒にいることそのものが生きるための手段なんじゃないかな。だから子どもの頃は他者と集団で協力し合う訓練として、学校で集団生活して「一緒に生きる技術を学んでいる」んだと思っているよ。』

その時はそんなに悪くない答えのように思っていたけれど、

後から読み返すと、なんかちぐはぐな感じもある。

『なぜみんなと一緒に勉強しなきゃいけないの?』の言葉に含まれる成分は何だろう。

人とのやりとりの中で蓄積されたズレ感や違和感、集団への不安、一緒にの苦しさ、そしてこんな思いをせずにはいられない自分へのやるせなさ。

そんなあれこれが詰まっているんじゃないか。

もっと違う言葉かけがあったんじゃないか。

塩梅についての雑感

「ゆっくりでいいよ」という声かけは悪くない。人を傷つけない柔らかな響きがある。しかしこの言葉を安易に多用するとき、その意味は変化してしまう。

「登校しなくてもいいよ」という一見すると不登校の子を受容しているような言葉。逆に「がんばれ」といった相手に面と向かって鼓舞する言葉。何かを良し、何かを悪しとしたときから、言葉の持つ意味が変質するのを感じることもある。カウンセリングにおける「傾聴」、不適応や不登校における「個別対応」もそうだ。この方法がいいといった単純さは物事を混迷させる。複雑な変化の中でバランスをとる試行錯誤の連続、その中で見える都度の塩梅があるのではないか。

五木寛之氏の著書の中で、「同治」と「対治」という言葉を知った。氏の言葉を引用すると、たとえば「高熱を発したときに氷で冷やして熱を下げるようなやり方を対治」「十分に温かくしてあげて、汗をたっぷりかかせ、そのことで熱を下げるようなやり方を同治」というのだそう。

相手と向き合っただけアドバイスや励ましの言葉かけをする関わりもあれば、同じ目線に立ってただ一緒に寄り添ったり一緒に泣いたりする関わりもある。どちらが良い悪いではなく、相手の背景を理解し、状況を受け入れ、対話し、一緒に歩む中で、自然とその都度の関わりや言葉が発生する。その自然を阻害する他人事な打算や作為のなんと多いことだろう。

その日、その時の塩梅がある。

メリトクラシー（≒能力主義）社会のサバイバル

生きている中で、勝ち負けや立場の上下を決定づけられるイベントがある。それ以前に、そもそも最初から決まっている勝ち負けや立場の差異もある。人生は勝ち負けじゃないと言えば聞こえはいいが、そう言い切れる人はかなり恵まれているという見方もできる。

教育学者の本田（2005）は、日本の近代社会が『学歴をはじめとする手続き的で客観的な能力が求められてきたという意味で、メリトクラシー的であった』と述べ、さらに『今日では、コミュニケーション能力をはじめとする独創性や問題解決力などのような、より本質的で情動に根差した能力が求められるポスト近代社会（ハイパー・メリトクラシー）に移行しつつある』と述べた。能力により地位が配分される社会で、誰もに高度な力が求められる傾向がある。

社会学者の荻谷（2001）は、このようなポスト近代社会化において『自ら学び、自ら考える力など、個

人が主体的・自律的に行動するための基本となる資質や能力＝「生きる力」の育成に異を唱えることはむずかしい。だが、「自ら学び、自ら考える」個人、「主体的・自律的」に行動する資質を備えた個人に、だれもがなれるのか』と問題提起している。

高度化する現代、制度やシステムが張り巡らされた社会で、生活者である人が色々な場面で置き去りにされているように思える。立ち回りがわからず、かといってリタイヤもできず、行き場を失っている人がいる。

「APEX LEGENDS (エーペックス レジェンズ)」というサバイバルシューティングゲームがある。中高生から大人まで、幅広い年代を虜にしているクロスプラットフォームのゲームだ。そのゲーム中では、次第に活動できるエリアが狭まり、60人いるプレイヤーが撃ち合いながら徐々に脱落していく。現実社会においても、制度やシステムやネットワークや倫理観やあれこれが一以上に積み重なったことで、このゲームの状況さながら、多くを求める能力主義が人を追い立て、それについて行けない人を順に侵食して脱落者を増やしているのではないか。また一方で、脱落することが表面的に自分を守る手段として定着しつつあるようにも感じられる。



Electronic Arts 『APEX LEGENDS』公式サイトより画像引用

そうした脱落が多くなっている実感からだろうか。まずは安心して笑いあえる場所、「ゆっくりでいいよ」の言葉は、自分を立て直す休憩所という意味においては、まんざら悪くないように私には思えてくる。

引用・参考文献

Electronic Arts 『APEX LEGENDS』公式サイト <https://www.ea.com/ja-jp/games/apex-legends>

本田由紀 (2005) 『多元化する「能力」と日本社会 ―ハイパー・メリトクラシー化のなかで』 NTT 出版

五木寛之 (2000) 『他力』 講談社

荻谷剛彦 (2001) 『階層化日本と教育危機―不平等再生産から意欲格差社会へ』 有信堂